

ドイツのクリュメル原発

変圧器火災事故から2年—運転再開の試験中にまたも変圧器トラブルで緊急停止 原発廃止促進で政策論争再燃 / 独総選挙の大きな争点に

7月4日午後、ドイツのハンブルグでは約1,500台の信号機が突然停止した。原因は、ハンブルグ近郊のクリュメル原発の緊急停止。同原発は2007年6月に変圧器の火災により稼働を停止し、今年6月に地元シュレスヴィヒ・ホルシュタイン州政府から運転再開許可を受けて、試運転を開始したところだった。今回の事故により周辺が停電し、水道管の破裂や断水により何千軒もの家が被害をこうむった。製鉄所が停電するなど鉄鋼やアルミニウム産業なども影響を受けたという。

今回の緊急停止の原因は、変圧器のショートである。この原発を運転しているバッテンフォール・ヨーロッパ社は2年前の火災後変圧器を修理したが、今回の事故の3日前には別の変圧器が不調を起こすなど、変圧器のトラブルが相次いでいた。実は3日前にも緊急停止していたが、バッテンフォール・ヨーロッパ社が2日後に運転再開を強行した挙句、今回の緊急停止が起こったという。さらに同原発では、規制当局の指示に反し、変圧器の計測計器が設置されていなかった。今回の事故を受け、同社は発電所長を更迭する一方、変圧器を新品に交換すると発表した。そのため来年の5月頃まで運転を停止するという。同社はクリュメル原発は安全だと主張するが、事故後の調査で燃料棒の破損が見つかった。

環境保護団体は、今回の事故を受けて同原発の停止を求めると同時に、バッテンフォール・ヨーロッパ社からの電力購入をボイコットするよう呼びかけている。ドイツでは顧客側が電力会社を選択できるからだ。実際、7月15日付電気新聞によれば、2年前の変圧器火災事故後、同社は25万人の顧客を失っている。というのも、2年前の変圧器火災事故では、当局への通報遅れや情報隠しなどで大きな批判を浴びた。今回のボイコット運動は、大きな痛手を与えるはずである。なお、同社はスウェーデンに本拠地を持つバッテンフォール社の子会社であるが、バッテンフォール社自身も2006年にスウェーデンのフォルスマルク原発で電源喪失事故を起こし、大きな批判を浴びている。

今回の事故は、9月27日に総選挙を控えているドイツで、原発廃止政策をめぐる激しい論争を引き起こしている。原子力問題が、総選挙の重要な争点となっている。日本では、1970年の運転開始から来年には40年が経過する美浜1号炉を、寿命を延長して60年運転しようとしている。ドイツの状況は全く違い、このクリュメル原発は、1984年の運転開始から34年が経過する2018年での運転停止が決まっている。しかし、原子力に批判的な社会民主党のガブリエル環境相は、事故直後から老朽原発の早期閉鎖を主張し、前シュレーダー政権時に決定された原発の廃止期限を延期しようとするメルケル首相を痛烈に批判している。その他社会民主党や緑の党からも、メルケル批判の声があがっている。以前社会民主党にいた左派などで構成される「左翼党」は、原発の即時全廃を要求している。今後のドイツの動きに注目していこう。



緊急停止したクリュメル原発 - その閉鎖を訴えるグリーンピース・ドイツのHPから。大きな×印がつけられている